

研究 覚え書き

中国文化が仏教の教えとその内容に及ぼした影響は、尽きることのない研究領域である。西洋世界では、それは特にケネス・チェンの諸論文ならびに彼の著作『仏教と中国社会（邦訳題）』（一九七三年）によって明るみに出された。その影響下にも、仏教の異文化適応（この場合、中国化）の問題とともに、その在家化の問題が提起された。

中国では、仏教も、さらには道教も、国家の諸分野での儒教の支配的地位を覆すことはできなかった。それ故、仏教は、新しい文化の中で布教するため、この状況に適応しなければならなかった。そこで、鳩摩羅什到来以前の、中央アジア出身の初期の訳経者たちは、仏教の道徳的原理を理解可能な言葉で翻訳しようと努め、それ故、儒教的な用語や、さらには道教的な用語を借用しなければならなかった。そこから中国の疑経が作成され、仏教をよりよく受容させるため、道教や儒教の宗教的表現と民間信仰を混淆したのである。

西暦六七年頃、後漢の明帝が見た、仏教の来朝についての夢も、二〇〇年前後の仏教者たちが発

仏教の中国化

ベルトラン・ロシニョール

展させた一つの「発明」であった。仏教が皇帝から公的なお墨付きを得たと装うことで、中国の仏教者たちは、自らの宗教に、貴族や庶民が口をはさめない権威をまとうせようとしたのである。

儒教道徳では家族に重要性を認めていたが、このことは中国での仏教の伝播・拡大の中で、在家者に付与された地位に影響した。維摩詰によって示された範例は、中国の下級貴族の間での仏教伝播に貢献した。父親であり、立派な家柄の富裕な家長であり、人格によって光り輝く維摩詰は、確かにインドの苦行者のイメージではなかった。同様に、『法華経』の中では多数の譬喩譚が描く通り、在家者の地位は非常に存在感があった。

一般的に言って、インド世界とは反対に、仏教の関心をより現象世界の人間存在の方に向かせることに、中国文化は寄与した。それは、個人的宗教（世俗世界からの解脱）から、より普遍的な宗教（世俗世界とそこに暮らす衆生の救済）への移行に寄与したのである。

（原文…フランス語）
（Bertrand Rossignol / 東洋哲学研究所海外研究員）